

1987 年連邦議会選挙戦におけるドイツ社会民主党 ——連合問題と党内状況に関するミクロ分析のためのノート——

小 野 一

Die Wahlkampagne der SPD bei der Bundestagswahl 1987
——Zur mikro-politischen Analyse in bezug auf innerparteiliche
Lage und Koalitionsproblem——

Hajime ONO

はじめに

1. 選挙戦プランニング

- 1.1. 潜在的支持者層の調査
- 1.2. 選挙における獲得目標
- 1.3. 選挙戦術

2. 選挙戦の経過

- 2.1. 駅伝戦術の破綻
- 2.2. 目標と戦術の転換
- 2.3. 選挙結果とその分析

3. 選挙後の SPD の党内状況

- 3.1. 選挙戦の批判的総括とその限界
- 3.2. 「赤と緑」をめぐるタブーの解除と党内対立の顕在化

むすびにかえて

注釈

はじめに

1987 年連邦議会選挙に際し SPD（ドイツ社会民主党）は、単独過半数獲得という無謀な目標を掲げ、破綻する。このことは混乱の結果としばしば評されるが、問題は決して単純でない。SPD 主導の政権交代が不可能なことを示すデータがあり、しかも政党連合をめぐる党内論争を回避せねばならぬという状況下では、単独過半数という目標設定は、やむにやまれぬ、ないしは合理的な戦術的判断であったとすら言い得るのである。

本稿は、SPDの問題状況の一端を、87年選挙戦を通じて明らかにする試みである。叙述は、選挙戦プランニング、選挙戦、選挙後の党内状況、という順で行われる。この論考により、多様な党内グループ・支持者の統合や連合問題といったSPDの構造的問題が、より明解に示されるであろう。

1. 選挙戦プランニング

1.1. 潜在的支持者層の調査

SPDの潜在的支持者はどのくらいいるのか。党執行部は、調査機関InfratestやSINUSの協力により、戦術策定のための基礎データをまとめ、84年6月の会議に提出した¹⁾。

報告書は、まず、有権者を政党支持の強度により三つのカテゴリーに分類する。すなわち、従来から特定政党の支持者でありそれを変える意思を目下のところ有しない「基幹支持者層」、特定政党の支持者であるが時として他党に投票することもある「弱い支持者層」、および特定の支持政党をもたず状況次第で投票する政党を決める、言葉の本来の意味での「浮動票」。調査結果によれば、「基幹支持者層」に属するのは、有権者のおよそ6割である。その内訳は、CDU/CSU（キリスト教民主社会同盟）が30%、SPDが27%、FDP（自由民主党）が3%、緑の党が2%である。

これに第二、第三カテゴリーからの支持を加えたものが各党の潜在的支持者で、その割合は、CDU/CSUが46%、SPDが41%、FDPが6%、緑の党が7%となる。

それではSPDは、多数派形成に必要な残りの部分を、どこから調達すべきであろうか。まず、左にウィングを伸ばす戦術では、緑の党を「干上がらせる」のであれ、連立を組むのであれ、最大でも48%と、過半数には達し得ない。ということはSPDは、CDU/CSUの周辺的支持者を動員しなければ多数派を形成できない²⁾。

もうひとつの注目すべき調査結果は、SPD支持者の政治的態度や価値観が非常に多様なことである。こうした事情を説明するため、「ミリュー」という概念が援用される。

SINUSの調査は、八つのミリューを区別する³⁾。そのうち、SPD支持者の割合がCDU/CSU支持者に比べて著しく高いのが、「伝統的労働者型」、「伝統なき労働者型」、「享楽主義型」、「左派オルタナティブ型」の各ミリューである。SPDはこれら四つのミリューから、支持者の37%をリクルートしている。これに対してCDU/CSUにバイアスがあるのは、「保守的上流型」および「小ブルジョア型」ミリューであり、支持者の52%がここに属する。「上昇志向型」および「テクノクラート・リベラル型」ミリューでは、SPDとCDU/CSUの支持者が拮抗している。なお、「享楽主義型」および「左派オルタナティブ型」ミリューでは、緑の党の支持者の割合が高い。

SPDの基盤をなす四つのミリューは、相互にまとまりのあるものとはいえない。価値観においても政策選好においても、「伝統的および伝統なき労働者」を一方の極に、「享楽主義」

表 ミリュー別の各党支持者の割合

	全有権者	CDU/CSU	SPD	FDP	緑の党	その他
保守的上流	10%	59%	17%	13%	1%	10%
小ブルジョア	29%	55%	29%	4%	1%	11%
伝統的労働	9%	34%	52%	2%	1%	11%
伝統ナキ労働	8%	31%	49%	2%	6%	12%
上昇志向型	21%	40%	40%	6%	4%	10%
テクノ・リベラル	11%	36%	39%	10%	7%	8%
享楽主義型	8%	17%	42%	2%	27%	12%
左派オルタナー	4%	13%	46%	2%	32%	7%

(SPD, Planungsdaten (注 1) の記述をもとに作成)

および「左派オルタナータイプ」をもう一方の極に、際立った異質性を見せる⁴⁾。平均値は両者の中間に位置する。すなわち典型的な SPD 支持者像というのは、実は、統計の上で観念的に想定されたモデルという性格が強い。それは、CDU/CSU や緑の党の支持者の特性が、それぞれの中心的ミリューとほぼ一致するのとは、対照的である。

SPD の選挙戦略上のカギを握るのは、「上昇志向型」および「テクノクラート・リベラル型」ミリューである。両者あわせて全有権者の 32% を占めることだけが、理由ではない。両者の政策選好上の特性は、SPD 支持者のそれとも CDU/CSU のそれとも、一致しない⁵⁾。すなわち、ここはまだ勝負のついていない領域だけに、重要なのである。

このような調査結果を、党執行部は、SPD の多数派形成の可能性を示すものと解釈する⁶⁾。多様な価値観をもった諸グループの間で魅力的な政策的提言を行い得る政党になるなら、成功への見通しは開かれている。支持者の多様性も、リスクであると同時にチャンスでもある、と。言うまでもなく、これは党の戦略ペーパーであり、党員の士気に水を差すような結論には意味がない。しかしこの時点ですでに、かなり楽観的な見通しがあることは、否定できない。

1.2. 選挙における獲得目標

① 単独過半数という目標設定

「我々社会民主党は、改革のための大規模な国民政党である。我々は多数派のために戦う。我々が求めるのは選挙民男女であって、連合パートナーではない」。選挙目標と連合政策に関する、あまりにも明快な宣言である。これは投票日を 3 ヶ月前にして開かれた、SPD オフフェンブルク特別党大会決議の一節である⁷⁾。

党執行部がこの目標の実現可能性を本気で信じていたとすれば、相当楽観的な情勢見通しがあったことになる。何がこうした楽観論を生む原因になったのだろうか。

第一に、85 年 5 月のノルトライン＝ヴェストファーレン州議会選挙での経験が挙げられる。

ヨハネス・ラオ首相の下で絶対多数を獲得した、同州での成功の再来が、期待されたのである。その時の選挙戦を指導したホムバッハが、いわゆるデュッセルドルフ派の中心人物として、今回も大きな役割を果たした。単独過半数という目標から、緑の党との連立拒否、政治的中道に照準を合わせた選挙戦、宣伝活動や運動の形態に至るまで、87年連邦議会選挙戦はノルトライン＝ヴェストファーレン州のコピーであった⁸⁾。

第二に、戦術策定過程での楽観論の増幅が、指摘される。上述の戦略ペーパーに潜む楽観論は、実はまだ控えめだった。ザールラントとノルトライン＝ヴェストファーレンでの勝利の興奮覚めやらぬ中、さらに好都合なデータが出てきた。世論調査機関 FORSA のデータであり、それによれば、86年初めの時点で SPD の潜在的支持者は 47% と見積もられた。この数字からすれば、CDU および緑の党の周縁部の支持者の動員により、SPD の単独過半数も不可能ではない⁹⁾。このデータに基づき、目標達成に必要な積み増し票が、選挙区ごとに算定された。

達成不可能な目標設定に際し、FORSA のデータのもつ意味は大きかった。Infratest のデータが 86 年を通じてあまり注意を払われなかった経緯をみれば、党執行部の選挙戦顧問たちの間では、戦術策定のための客観的判断材料としてよりもむしろ選挙目標に信憑性を与えるために、FORSA のデータが好んで用いられたことがわかる¹⁰⁾。ミリュウ概念という当時としては最新の分析手法が援用された Infratest のデータがありながら、それがあまりにも等閑視されたことには、選挙後の総括でも批判的に言及されている¹¹⁾。

楽観論は、データの解釈過程でさらに増幅される。FORSA のデータは SPD の人気が高まっていた時点での調査であり、一時的な現象が誇張されている。だがこれでもまだ十分でない。党執行部は、データ処理上のトリックにより、目標の実現可能性を大きく見せようとする。積み増し目標の算定は、目標とする有効第二票（政党票）からの前回得票の減算をもってなされるが、その際の前回得票として第一票（候補者票）が使われている。計算方法として非合理的なことは言うまでもないが、重要なのは、これにより目標達成に必要な積み増し票が少なく見積もられることである。SPD のような大政党では、第一票は常に第二票を上回るから。さらには、72 年選挙時の成績との対比により、今回の獲得目標が過去の達成実績を上回るものではないことを示す。72 年選挙は SPD の得票がピークに達した時であり、目標を容易に見せようとする意図は、ここでも見てとれる¹²⁾。

こうした不適切な状況判断や操作があったのは事実としても、単独過半数という目標設定が全くの戦術ミスであったとは、必ずしも言い得ない。もしいずれの連合オプションに傾斜した選挙戦術をとっても SPD 主導政権の可能性がないなら、党執行部としては、単独過半数を目指す以外に選択の余地はない。しかも、緑の党との関係をめぐる党内論争¹³⁾の回避を重大な関心事とする状況下では、連合問題では極力沈黙する必要があった。

要約すれば、次のように言えよう。87 年の連邦議会選挙において、SPD は、単独過半数はもとよりいかなる連合によっても、同党主導の政権交代を実現する可能性はなかった。単独過半数という目標設定は、こうした閉塞状況からの帰結であり、連合をめぐる党内論争の回避と

いう意味では、合理的な戦術的判断ですらあったのである。

② 政策的基本線

87年選挙戦における政策論争の基本線は、ニュルンベルクおよびオッフエンブルクの党大会を経て採択された政策プログラムである。フォークトによれば、SPDの選挙戦は、基本的には三つの重点テーマ（社会的公正、軍縮、環境保護・エネルギー）と四つの個別テーマ（雇用政策、税制、市民の権利、性の平等）に向けられた¹⁴⁾。

社会的公正と関連し、現政権下で勤労者の税・課徴金の負担が増大し、補助金が増大する一方、自治体における公共投資が減少し、失業者、子持ち世帯、年金生活者、障害者および生活保護受給者の負担が一方的に増大している、と指摘される。SPDは、すべての人の社会的安定がドイツ社会の活力の前提であるとの認識の下、より多くの公正・機会の均等・連帯を通じた社会平和の実現を目標とする。社会政策を取り巻く条件変化の中で求められるのは、社会国家の解体ではなくその改造である。そのために、社会保障と社会的自助との適切な結合が支持される。

大量失業の克服のために、労働組合の推進する時短政策が支持される。注目すべきは、「労働と環境」という特別基金の提案である。環境テクノロジーへの投資に低利子の貸付を供与するという制度により、環境保護と雇用創出の両側面での効果が期待されている。租税・財政改革では、低・中額所得者に重点のある減税、高額所得者への追徴金、補助金カット、エネルギー消費税、自治体財政改革、税金のかれを目的とした資本の海外流出の防止、などが要求される。

第二の重点である平和政策に関し、ヨーロッパにおける核兵器・化学兵器の軍縮が求められる。SPDは、西側軍事同盟のワク内でのドイツの安全保障を肯定するが、NATOは純粋に防衛的性格のものでなければならず、その改革と兵力削減とが求められる。

第三の重点をなす環境保護は、国家目標として基本法（憲法）に明記されるべきである。今回重視されているのは、核エネルギーからの撤退とそのための政策措置である。ただしその期限は明記されていない¹⁵⁾。産業社会のエコロジー的改造は、雇用確保と対立するものとはとらえられていない。原子力なき安全なエネルギーへの転換過程では、新たな雇用創出効果すら期待されている。

その他のテーマとして、教育や職業生活における男女の実質的平等のための政策が、法的措置も含め要求される。家庭生活と職業生活との両立や社会的・政治的参加の問題にあっても、性の平等が求められる。またSPDは、自由と民主主義が現政権の一連の政策の下で脅かされていることを批判する。

全体として、こうした多様な政策提言の内的関連は小さく、プログラムの一貫性は不明瞭であるという¹⁶⁾。

1.3. 選挙戦術

① 駅伝戦術

SPDの選挙戦スケジュールは、六つの時期に区分される¹⁷⁾。まず、86年1月から6月15日のニーダーザクセン州議会選挙までの「予備的動員期」。それに続き、8月末のニュルンベルク党大会までの「共感とデビューの時期」。第三期は、「テーマ的周知徹底期」。この時期の終わりは、10月25日のオッフエンブルグ特別党大会である。それに続く「動員期」は、同年11月の、25万規模の大集会により締めくくられる。この時期の半ばの11月9日には、ハンブルク議会選挙が行われる。「クリスマス特別期」は事実上の休戦期である。最後に、年明けから1月25日の投票日までが、「決戦期」である。

こうしたスケジュールに対応するシナリオは、「駅伝戦術」(Etappenstrategie)とよばれる。それは、86年度のすべての州議会選挙で勝利し、回を重ねるごとに選挙民に対する吸引力を強め、社会民主主義の固有の力を引き出す、というものである¹⁸⁾。

連戦連勝を通じた動員の極大化というこの戦術は、大きなリスクを伴う。もし駅伝区間のどこかひとつで上昇傾向に歯止めがかかれば、その時点で戦術全体が崩壊するのである¹⁹⁾。このことは執行部自身承知していたであろうが、安全策は講じられなかった。

こうした危険な賭けとも言うべき駅伝戦術は、上述の選挙目標との関連で説明されるべきである。単独過半数という目標自体が現実性の乏しいものならば、目標達成のシナリオに無理が生じるのも、当然のことであった。

② 新しい選挙戦スタイル

今回の選挙戦では、人物に傾斜した非政治的キャンペーンが特徴的である²⁰⁾。

選挙戦のすべての局面で、首相候補ラオが前面に押し出された。86年夏の「サマーツアー」(7月25日～8月22日)にもみられるように、「普通の人」との対話・接触の機会を多くもつことが追求された。その他にもラオは、ラフなスタイルのインタビューやテレビのトークショーなどに数多く登場した。アメリカで「シンボリック・アプローチ」とよばれるスタイルである。宣伝パンフレットでも、さまざまな社会グループの人々のラオを支持する声が掲載された。彼のパーソナリティーを特徴づけるのに、人間的、キリスト教的、実直、平穩、調和、情熱、端正、連帯などといった言葉が使われた。

野党がかくも強力な人物キャンペーンを展開するのは、ドイツでは前例のないことである。ラオは、ノルトライン＝ヴェストファーレン州首相としての実績に支えられ、世論の高い評価を得ていた。それに対し現職連邦首相コールの人気は今ひとつ見栄えがせず、SPDはこの好条件を活かすことを企図したのである²¹⁾。

人物に傾倒したキャンペーンの性格をよく表しているのが、例えば次の選挙スローガンである。「ドイツは、信頼のおける首相を、今いちど必要としている/あなたの第二票で、ヨハネス・ラオを選びましょう/SPD」。言語学の視角からの研究によれば、ここには、首相候補の実務能力と信頼性を選挙民に確信させ、かつ彼との一体感情を高める意図があるという²²⁾。注目

されるのは、「第二票でラオを選ぶ」というレトリックである。もちろんこれは首相交代を意味しているのだが、政党票である第二票をめぐるキャンペーンでさえ、人物が前面に出ている。いわば人物を加味した第二票キャンペーンは、主として SPD と CDU の中間票の獲得を意識したものと思われる。

このことは、政治的対決を極力回避した選挙戦スタイルとも関係がある。「分裂ではなく和解を」というモットーの下、対立を煽るよりも、社会統合のほうが重要だとされた。このような SPD の選挙キャンペーンは、CDU のビーデンコップをして次のように言わせた。ラオは、調和を求め政治的対立を嫌悪する人々の願望を、人々を分裂させるのではなく和解させる、という一見非政治的な政策的提案と結びつけている²³⁾。

人物に傾斜した非政治的キャンペーンの背後には、外的要因とともに内的要因がある。党内外に大きな統合力を有する首相候補を前面に押し出すことには、連合問題や政策内容をめぐる党内論争を可能な限り回避する、というメリットもあるのである。

2. 選挙戦の経過

2.1. 駅伝戦術の破綻

86 年初めの時点では、野党勝利の可能性もまだ排除されていなかった²⁴⁾。しかし同年行われたニーダーザクセン州、バイエルン州、およびハンプルクの議会選挙は、SPD の伸び悩まないしは敗北であり、「駅伝戦術」の破綻は早くから明らかになっていた。

6 月 15 日のニーダーザクセン州議会選挙では、SPD は、首相候補シュレーダーの下、政権交代を掲げて戦うが、5.6% の得票増にもかかわらず CDU には及ばなかった。チェルノブイリ原発事故直後の環境問題への関心の高まりの中で苦戦を強いられた CDU は、前回比 6.4% の後退で過半数を割るが、FDP との連合により政権を維持する。

政権交代こそ果たせなかったものの、得票を伸ばした SPD にあっては、状況は追い風と考える向きもあった。だがこの解釈は気休め以上のものではなかった。選挙結果は、単独過半数という目標が現実的でないことを示しているからである。世論状況も、ニーダーザクセン州議会選挙以降、CDU 優勢に傾いていった²⁵⁾。87 年の連邦議会選挙は、前年 6 月 15 日の時点ですでに勝負がついていた、と言われる²⁶⁾。

この選挙で SPD にとって幸いだったことがあるとすれば、それは、皮肉なことだが、緑の党と合わせても過半数に到達しなかったため、連合をめぐる党内論争の激化が回避されたことであろう。もしヘッセンに続きニーダーザクセンでも赤緑連合が成立していたなら、SPD は、連邦レベルでは緑の党との連合を退けながら州レベルではそれを行っていることを、党内外に正統づけるという、難問に直面したであろう²⁷⁾。

CSU の牙城バイエルンでは、SPD は得票率 35% を目標として、10 月 12 日の選挙に臨んだ。前回比 4.4% 後退の 27.5% との結果に、同党のショックは小さくなかった。

それでもバイエルンの場合には、敗因を地域的特殊性に求めることができたが、今度は伝統的牙城で大敗北を被った。11月9日のハンブルク議会選挙では、SPDは、人物キャンペーンと地域的一体感情の動員により単独過半数を目指すという、これまた連邦議会選挙に類似した選挙戦を行った²⁸⁾。しかし同党の得票は、前回比9.6%後退で戦後最悪となった。その結果成立したSPD単独少数派内閣は、GAL（緑の党/オルタナティブリスト）の閣外協力に依存する不安定なものであった。

投票行動調査の示すところによれば、かつてのSPD票のうち、48,000がCDUに、FDPとGALにそれぞれ15,000票が流れ込み、58,000人が棄権したという。SPDは市内全域で得票を後退させている。GALに票を奪われた地域もあるが、注目すべきは労働者居住区の動向である。それに該当する10の人口密集地では、SPDが得票を11.9%後退させ、CDUとGALがそれぞれ6.7%と2.5%伸びている²⁹⁾。

SPDの大幅な後退の原因は、伝統的支持基盤である労働者層と、リベラルないしはエコロジー志向のグループの両方向において、動員能力が弱まっていることに、求められよう³⁰⁾。この推定は、SPD独自の全国調査とも符号する。それによれば、SPDは86年を通じ、失望したCDU/CSU支持者の間で票を開拓することに成功しなかった。また、SPDからCDU/CSUになびく傾向は、その逆よりも強いという³¹⁾。他党支持者、とりわけCDU/CSU周縁部の獲得により単独過半数を達成するという目標の非現実性は、今や疑う余地のないものである。

首相候補ラオは、ハンブルク選挙以後、党内で孤立した感がある。彼と党首ブランドとの人間関係が、このころ目立って険悪になった。ラオの側近のホームバッハでさえ、目標達成に懐疑的になっていた。ラオは12月に入ってようやく、緑の党の閣外協力に依存するSPD少数派内閣への用意を表明した³²⁾。

2.2. 目標と戦術の転換

選挙目標は、駅伝戦術が破綻する中で次第に後退していく。もちろん、単独過半数獲得という公式目標が正式に破棄されたことはない。しかし党の指導的人物の言動を辿ると、この目標が後退しているのがわかる。

この種の発言では、86年夏にブランドが、ニーダーザクセン州議会選挙を評して、43%の得票は立派な成功、と語ったのが最初であろう。彼はその後この発言を訂正し、ナンバーワンのチャンスがあると言うが、9月以降は、得票ではなく議席数の単独過半数を新たな目標とすべき、との立場をとる。また彼は、ハンブルク選挙翌日の党執行部会議の席上、今やSPDはCDU/CSUの絶対多数の阻止を目標とすべき、と言った³³⁾。選挙目標は、やがて、可能な限りの成果をあげる、というところまで引き下げられる。

選挙目標の後退は、戦術の見直しにも通じる。それがはっきりした形をとって現れたのは、ハンブルク選挙敗北以後のことである。見直しは、組織と内容の両面でなされた。

組織体制上の問題に関し、いわゆるボン派とデュッセルドルフ派というふたつの中枢の存在

が選挙戦指導に混乱を引き起こした、との指摘がある³⁴⁾。すでに9月15日の党執行部会議は、指導機関の重複・対立状況を避けるべく、デュッセルドルフの企画グループの解体を決議していた。デュッセルドルフ派は人物キャンペーンを、ボン派は政策論争を重視していたが、86年秋には後者が執行部内で支持を得てきたのである。ハンブルク選挙翌日の党執行部会議において、デュッセルドルフ派の代表人物クレメントが辞任し³⁵⁾、ここに連邦事務局長ペーター・グロッツを中心とするボン派のヘゲモニーが確立する。

組織面での主導権の移行は、戦術内容上の変化をもたらした。人物に過度に傾斜した「ピラミッド戦術」への批判が高まり、政策テーマ志向の選挙戦が行われるようになる。

その際の目立った変化は、与党に対する対決色を強めたことであろう。例えば、86年末、グロッツは、「社会的分裂政策に抗しての10の論点」を起草し、CDU批判のポイントを明らかにした。また対決的キャンペーンは、「マイナスの首相」コールという形で擬人化された。それとの対照によりラオの人気と政策能力を強調する、という戦術がとられるようになったのである。とはいえ、終盤のこうした攻勢的スタイルがラオのポイントにつながったかどうかは、疑わしい。彼自身は穏健路線を維持していたからである³⁶⁾。

今ひとつの変化は、ノルトライン＝ヴェストファーレンとザールラントにおける選挙戦の活性化である。選挙戦の初期には、伝統的にSPD支持の弱い南ドイツでの得票増が、目標達成のカギを握るとされていた。しかし単独過半数の可能性が遠のいた終盤戦では、それとは逆の理由から、牙城地域に重点が置かれたのである。ノルトライン＝ヴェストファーレンでは、クレメントとともに執行部を辞任したホムバッハラを中心に、人物キャンペーンを軸に選挙民の一体感情に訴えるという、連邦レベルでは頓挫した選挙戦が展開された。非公式には基幹州確保戦術とよばれるこのキャンペーンでは、他の州を5%上回る得票が目指された。一方ザールラントでも、オスカー・ラフォンテーヌの指揮の下、独自の選挙戦が展開されたが、ここではラオはわずか1回、短時間登場しただけであった。

ノルトライン＝ヴェストファーレンでは票を積み増し、ザールラントでは後退を最小限にとどめたことから³⁷⁾、両州における特別キャンペーンは成功だったといえる。だがここには、後述するように、選挙敗北後を見越した思惑が働いていた、とみるべきであろう。

2.3. 選挙結果とその分析

87年1月25日の連邦議会選挙は、予想どおり与党連合の勝利であった。CDU/CSUは前回選挙を4.5%下回る得票で戦後最低となったが、2.1%増のFDPとともに政権を維持した。SPDは1.2%減。緑の党は大幅に前進し、FDPとともに今回選挙の勝者となった。SPDの得票率後退はCDU/CSUより少なかったとはいえ、単独過半数は言うに及ばず、政権交代を果たし得なかったのだから、同党の敗北は明らかである。

SPD執行部は、独自の選挙結果分析の中で敗因を探り、内部の報告書にまとめている³⁸⁾。以下、その中から興味深い論点をみていこう。

年齢別では、SPD 支持者はほぼ均等に分布している。若年層では、SPD 支持者は CDU/CSU 支持者をわずかに上回るが、それは今回、若年層の CDU/CSU 支持が後退したことに帰せられよう。若い女性の間で SPD は最大派閥だが、今回大幅な支持喪失を経験したのもこのグループである。支持政党の移動が最も激しかったのが 35 歳から 45 歳までの層であり、CDU/CSU は 9.1% の票を失っている。緑の党はここで 5.2% 増えているが、若年層での増加は平均を下回る。ここから確認できるのは、各世代の投票行動の安定性である。CDU/CSU の支持が芳しくない世代では、83 年選挙時もやはりそうだったのであり、若年層における緑の党の魅力が以前ほどでなくなっているのは、同党がその主力である「1968 年世代」とともに年をとっているからである。

注目すべきは大都市および事務系・サービス産業中心地における投票行動である。大都市の SPD すべてが問題を抱えているわけではなく、著しい地域差がみられる。平均以上の後退を経験しているのが、ハンブルク、ハノーファー、フランクフルト、シュトゥットガルト、ミュンヘンである³⁹⁾。SPD が問題を抱える南ドイツの都市では、緑の党が票を伸ばしていることが多い。

SPD 票の大量喪失は、テクノ産業を抱えた経済成長の著しい地域でみられる。それに対し、伝統的な意味での労働者の多い地域では、同党は比較的良好な成績をあげており、逆に CDU/CSU は平均以上の後退を経験している。すなわち、近年の SPD の伸び悩みは、労働者に限られたからではなく、労働者が全般的に減少したからである⁴⁰⁾。

州別では、SPD がわずかながら得票を伸ばしているのが、ノルトライン＝ヴェストファーレンとニーダーザクセンである。両州では緑の党の得票が平均以下なのが、印象的である。減少幅が最大のハンブルクでは、すべての党から票を奪われた 86 年 11 月の敗北パターンが、今回も繰り返された。それに対しノルトライン＝ヴェストファーレンでは、FDP と緑の党の得票増が他州並みである中で CDU の後退が著しい。同州では、SPD 票の緑の党への流出が、CDU の周辺的支持者の獲得により相殺されているのである⁴¹⁾。

この選挙分析全体を通じて目を引くのは、緑の党との競合が重視されていることである。選挙戦の企画段階では、CDU/CSU 支持者の獲得がより重要とされていたことと比べれば、これは印象的である。この相違は、党執行部内のヘゲモニーが赤緑連合路線に比較的オープンな立場をとる者へと移行したことの帰結でもあろうが、それだけではない。企画段階では、単独過半数達成のために新しい支持者層を開拓するという、いわば「攻め」の発想が前面に出ていた。しかし終盤戦では、自党支持者の離反を防ぐという「守り」の発想が前面に出て来た。CDU/CSU 支持者をねらったキャンペーンにより緑の党の側に失う票は、予想以上に多かったのである。

3. 選挙後の SPD の党内状況

3.1. 選挙戦の批判的総括とその限界

選挙翌日の党執行部会議では、それまでの過程で明らかになった問題点が、再度指摘された。それに続く2月2日の執行部会議は、グロッツの指揮下に委員会を組織し（以下、「グロッツ委員会」という）、報告書を作成させることを決めた。上述の選挙結果分析も、その一部である。グロッツこそ、デュッセルドルフ派に代わりヘゲモニーを確立したボン派の中心人物であったことを考えれば驚くに値しないことだが、委員会答申は、デュッセルドルフ派への攻勢という性格を色濃く示していた。そこでは、「中道」への傾斜、単独過半数という目標、駅伝戦術、「分裂ではなく和解を」という選挙哲学、過度の人物キャンペーン、政策内容上のプロフィールの不明瞭さなどに関する批判点が、繰り返されていた。そして、今後選挙戦指導は連邦事務局長が行い、指導機構上の重複はいかなる場合でも避けられるべき、と結論づけられた⁴²⁾。

グロッツ委員会報告は、こうした組織面での提言とともに、内容面での自己刷新の端緒をも含んでいる。それらは13のテーゼに要約されている⁴³⁾。以下、主要なものをみておこう。

「我々の社会における多様化は、SPD 支持者において、CDU/CSU 支持者よりも顕著に現れている」（第1テーゼ）。「SPD は多様な社会的・文化的潮流を統合せねばならない。さまざまな価値志向をもった選挙民男女が一体感を得られるような、プログラムの・人的・組織政策的提言を行う以外に、道はない」（第2テーゼ）。そのためには「『中道を獲得する』というスローガンはもはや役に立たない。……どのような政策をもってすれば価値志向を異にする人々の要求に応え得るか、という問いには、『中道』概念をもってしては答えられない」（第3テーゼ）。「SPD にとって重要なのは、自らの基幹支持者層、すなわち労働者および事務系職員に重点のある階層（ただし全人口に占める割合は減少傾向にあるが）を安定化させるとともに、産業構造の変化により重要性を増しつつある、上昇志向の階層やテクノ・リベラル型ミリユーにおける支持をも獲得することである。あるグループを他のグループと対立的にとらえることは、正しくない」（第4テーゼ）。

では、多様な価値志向の統合のために求められるものは何か。「もし SPD が自らの牙城や基幹労働者層に閉じこもりたくないのであれば、党は、個々の政治的テーマを貫く次のふたつの基本線に関して究明を行わねばならない」（第6テーゼ導入）。第一に、「SPD は、諸個人の自由裁量と連帯との間の緊張関係という問題をクリアしなければならない。……共同体的ルールの適用があらゆる領域におよび、個人主義的な行動の自由の範囲を狭めるのは、好ましくない。SPD は、可能な限り多くの個人主義的な行動の自由と必要な限りでの社会的・共同体的ルールという目標のために努力しなければならない」（第6テーゼ第1項目、下線は原文）。第二に「SPD は、業績と社会的保障との間の緊張関係という問題をクリアしなければならない。……社会的公正・安定と業績とは常に対立関係にあるとは限らず、両者は密接に結びついてい

るということを、SPD はこれまで十分に明らかにしてこなかった。社会・経済の近代化ではなく、近代化過程のリスクの軽減のみが SPD の関心事なのだ、と思われるならば、SPD の多数派形成能力という点で好ましくない。(第6テーゼ第2項目)。「SPD の将来にとって重要なのは、『業績』対『社会的リスクの軽減』および『個人主義的な行動の自由』対『連帯』といった対立図式を克服し、それらを統一的に処理できるかどうかである」(第6テーゼ結び)。

多様な、しばしば相互対立をはらむ諸価値を統合するという課題は、個々の政策領域にもみられる。例えば、「50, 60 および 70 年代にみられたような将来に対するほとんど手放しの楽観主義に代わり、技術発展に伴う危険性への認識が高まっていることは、至極当然であるが、同時に、大多数の人々の間では近代テクノロジーの発展が国際競争力と経済的福祉の前提と見なされていることもまた、正当である。SPD にとってはここに、発展の創造者となるチャンスが開かれているのだが、それは、CDU/CSU の盲目的な技術信奉主義にも、緑の党の盲目的な技術敵対主義にも与するものでなく、社会に有益な技術発展の展望を示すものである(第8テーゼ)。また、女性の地位向上の問題とも関連し、「SPD は、職業生活と家庭生活の両立のために戦う。その際重要なのは、女性および男性に対し生活様式のマスターをあてがうことではなく、自らの価値観や希望に適合した生活を営めるようにより多くの行動の自由を彼らに与えることである」(第9テーゼ)。

これらの課題は、どれも現代社会の難問中の難問である。その答えが、たかだか数十ページのタイプ印刷の報告書の中になからといって、グロッツ委員会の責任ではない。より重要なのは、選挙戦術上の問題点が十分に検討され、今後の活動にプラスとなる提言がなされているかどうかである。選挙戦指導の組織面に関することはともかく、政策内容面では、その評価は必ずしも肯定的でない。

単独過半数という目標は非現実的であり、駅伝戦術は大きなリスクを伴うものであった。この点は、グロッツ委員会の答申を待つまでもなく誰の目にも明らかである。より重要なのは、なぜそのような目標設定がなされたのかを問うことである。それは、委員会報告が正しく指摘しているように、SPD 支持者の社会的構成の多様性ゆえの困難な問題、ないしは政党連合問題に関する論争を回避する試みだったのである⁴⁴⁾。

連合問題について、委員会報告の中では究明されていない。できないのである。選挙戦略的にみた場合、ドイツの有権者の間では SPD と緑の党の潜在的支持者を合わせても過半数に達しないという、上述の SINUS のデータが示す状況が変わらぬ限り、赤緑連合路線を追求できない。FDP との連立も、同党が明確に CDU/CSU との連合路線をとっている限り、見通し可能な将来の現実的選択肢とはなり得ない。かといって CDU/CSU との連合(大連合)は、あくまでも他に選択肢がない場合の例外的ケースである。

また連合問題は、緑の党の登場以後の SPD では、多様な党内利害を最も集中的に表現するものである。報告書は、さまざまな政治的方向性を統合することの重要性を指摘するが、その具体的方策は示していない。示せないのである。利害の対立するグループ間に接点を見出す

試みは、口で言うほど単純でない、あるいは不可能かもしれないのである。

同報告は、個々の政策を統合する基本哲学がなく、「分裂ではなく和解を」というスローガンが人物キャンペーンに解消された点を批判する⁴⁵⁾。だがそうした「哲学」の提示が党内統合政策上ネガティブに作用する可能性を否定し得ない以上、この批判は一面的に思える。また、「我々は連合パートナーを有しない」という言明が SPD を敗北に導いた、という総括⁴⁶⁾は、自己矛盾ですらある。現実的な連合オプションは本当に存在しなかったのだから。ラオは執行部宛の手紙の中で、単独過半数という目標に代案はなかった、との立場を引き続き表明したが⁴⁷⁾これは正しい認識だった。それを批判することは簡単でも、ではどのような目標を掲げるべきだったか、という問いには沈黙するしかないのである。

このようにみていくと、グロッツ委員会の選挙総括は、満足のいく答えを与えるものではない。別の言葉で言えば、問題の所在の正しい指摘にもかかわらず、その解決の困難性を、すなわち今日の SPD の構造的問題を、この報告書は浮き彫りにしているのである。

3.2. 「赤と緑」をめぐるタブーの解除と党内対立の顕在化

86 年 12 月、ブランドは次期党首に立候補する意思のないことを表明、ここに後継者問題が具体化する。もはや勝ち目のない選挙を前に、首相候補ラオにはチャンスはほとんどない。そこで有力候補のひとりとして浮上してきたのが、ラフォンテーヌである。選挙戦終盤、ザールラントで独自のキャンペーンを展開していた彼は、先の州議会選挙での成果を武器に、党内権力闘争における地歩を固めつつあった。

単独過半数という目標の背後に緑の党との連合問題が潜んでいたように、党内人事問題も、政治的方向性をめぐる論争とかかわっていた⁴⁸⁾。ラフォンテーヌはいわゆる「ブランドの孫」世代に属し⁴⁹⁾、党内左派と目され、緑の党との連立にもオープンな立場をとっていた。ブランドの引退表明は「孫」世代の党内ヘゲモニーを促進し、赤緑連合へのかたくな拒否的態度で知られるラオの失墜とあいまって、緑の党との接近を容易にする方向において党内世論の転換点をなしたと言える。

「赤と緑」の実験は、すでに進行していた。理論面での刷新を押し進めていたのは、74 年に設立された、エップラーを委員長とする基本価値委員会である。同委員会は、81 年秋のレーベントール論争などを経て、改革構想を次々に打ち出し、89 年のベルリン綱領へ向け準備を整えていく。ラフォンテーヌも、理論サークル「進歩 90」の活動などを通じ、産業社会のエコロジー的刷新のプログラムを練り上げていく。一方実践の面では、85 年 12 月以来ヘッセンで、州レベルでは初の SPD と緑の党との連合政権が成立した。自治体での経験にも支えられ、ヘッセンは、「赤と緑」の実験のパイオニア・ランドとなった。

これに対抗し、緑の党との連立に批判的な党内右派は、「ゼーハイマー」とよばれるサークル⁵⁰⁾に結集した。人脈的、傾向的には、やはり保守派の議員サークル「カナル・アルバイター」との連続性が認められる⁵¹⁾。ただし親睦会的要素が強かったカナル・アルバイターとは異なり、

ゼーハイマー・グループは、政策活動を通じて議員団の統合に寄与し、議会内左派への対抗勢力を形成することを目的としていた⁵²⁾。

ゼーハイマー・グループは、選挙後のラオの失墜と左派の台頭という状況変化に機敏に反応し、勢力拡大の動きを見せた。かつてのシュミット政権のブレインのひとりヴィッッシュネフスキーをリーダーに据え、党議員団幹部の構成を一部変更させることにも成功した⁵³⁾。彼によれば、SPDの連邦議会議員193人中約80名の結集が見積もられるという。

選挙戦終盤、ノルトライン＝ヴェストファーレンのSPDは特別キャンペーンを展開したが、その中心となったのはホムバッハである。彼らの念頭には、SPDの牙城でのラオの声望を可能な限り無傷に保ち、選挙後の路線論争において、すでに緑の党との連立により一定の成果を上げていたヘッセンに対し優位に立つ、とのもくろみがあったと考えられる⁵⁴⁾。この時点で、ヘッセンが「赤と緑」の実験の先進地とすれば、ノルトライン＝ヴェストファーレンは反対派の砦になったと言えよう。もはや連合問題に関する統一的な方針などない。種々の連合が各州ごとに追求され、SPDは、状況次第でCDUともFDPとも緑の党とも連合する、古典的な意味での連合政党の機能を引き受けつつあった⁵⁵⁾。

こうしたデリケートな党内状況をどの程度理解した上でのことかは知らないが、87年6月の党大会で、先の選挙での中道路線を批判してズケズケとものを言ったのは、党首を引退したブランドであった。それに対して新党首フォークヘルは、党の結束を訴えて、言った。「連合をめぐるめどもなき議論は、過去のものとされねばならない。……絶対多数に達しない場合には、我々のアイデンティティを疑問に付すことなく、プログラムの本質的部分を実現できる政府は可能であるか、またそれはいかなる連合パートナーにより可能であるかが、問われなければならない。」⁵⁶⁾

連合問題を軸としてSPDがジレンマに直面しているという状況は、選挙前と少しも変わっていない。ラオとその側近がボンの舞台を去り、緑の党との連合がタブーでないような党内世論の変化が現れたことは、確かに重要である。その一方で、赤緑連合に対抗して結束を強めてきた党内保守派の動きも無視し得ない。連合問題をめぐる水面下での対立は、むしろ激化したと言うべきだろう。

党内世論状況の変化は、実に小さい、シグナルのようなものだったかもしれない⁵⁷⁾。だがそれが、党内で上昇の機会を伺う「ブランドの孫」たちの個性と結びついたとき、連合政策上の大きな変化となって現れた。「上昇志向型」や「テクノロジーベラル型」ミリューをはじめとする新しい支持者層への傾斜は、87年以後はラフォンテーヌにより体现された。80年代後半のSPDの統合問題を彼が解決してくれる、と考える理由はあった⁵⁸⁾。90年の連邦議会選挙では、彼の指導の下、明らかに赤緑連合を志向した選挙戦が展開されるのである。

むすびにかえて

本稿の基礎となる文章を執筆したきっかけは、ドイツ留学中、1965年および87年のSPD

の選挙戦を扱った、Krebs の著作と出会ったことである。同書の依拠するミクロ政治分析の手法は、政党活動における、パーソナリティーといったインフォーマルな要素の重要性を示唆する。とりわけ 87 年選挙の叙述から感銘を受けた筆者は、他の研究書に目を通し、ボンのフリードリヒ・エーベルト財団の文書館を訪れた。そこでは、SPD の内部報告書やテーマ別新聞切り抜きなど、重要な未公開文書を見ることができた。

筆者の目下の研究テーマである「赤と緑」の実験との関連から、87 年選挙は重要な転換点をなす。ラオの失墜、党内世論の変化、束の間の左翼ルネサンス。しかし、緑の党との連合に反対する右派の動きも見逃せない。党内保守派グループについては、従来綱領史中心に行われてきた感のある日本の SPD 研究では、情報が不足しているように思われる。

「赤と緑」の実験は、時代状況への有効な回答を与えぬまま、その第一段階を終了した、というのが筆者の見解である。「実験」の政治学的意味を、戦術・思想・政策実践の諸側面から問うことが、筆者のテーマに他ならない。今後研究は、各州の政策に関する実証研究へと進んでいかなければならないが、本稿はその出発点となろう。

註

- 1) SPD, 1984 : Planungsdaten für die Mehrheitsfähigkeit der SPD : Ein Forschungsprojekt des Vorstandes der SPD : Zusammenfassender Bericht. Bonn
- 2) Ebd., S. 20
- 3) Ebd., S. 32 ff. : SINUS の分析は、政治的態度や価値観や生活スタイルに基づくグループ分けを投票行動分析に適用した、草分け的存在である。SINUS は八つのミリューを区別するが、やや遅れて発表されたコンラート＝アデナウアー財団系調査機関の研究は、九つの生活スタイルを区別する。Rolf Zundel, 1987 : Auf der Suche nach dem typischen Wähler. in : *Die ZEIT*, Nr. 4/1987 ミリューに関する最近の研究としては、Vester/Oertzen/Geiling/Hermann/Müller, 1993 : *Soziale Milieus im gesellschaftlichen Strukturwandel : Zwischen Integration und Ausgrenzung*. Köln
- 4) SPD, 1984 : Planungsdaten, S. 73, S. 84
- 5) Ebd., S. 94
- 6) Ebd., S. 7
- 7) SPD-Vorstand : *Wahlparteitag der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands* : 25. Oktober 1986, Offenburg, Oberrheinhalle : *Protokoll der Verhandlungen*. S. 115 同年 8 月のニュルンベルク党大会でのラオの発言も参照。*Protokoll vom Parteitag der SPD in Nürnberg*, 25.-29.8.1986. S. 134
- 8) Thomas Krebs, 1996 : *Parteiorganisation und Wahlkampfführung : Eine mikro-politische Analyse der SPD-Bundestagswahlkämpfe 1965 und 1986/87*. Wiesbaden, S. 128
- 9) Christoph Palmer, 1993 : *Der Bundestagswahlkampf 1986/1987*. Frankfurt/M., S. 152
- 10) Krebs, a.a.O., S. 149 ; 同書注 182 も参照
- 11) SPD-Vorstand, 1987 : Die Bundestagswahl vom 27.1.1987 : Analyse und Konsequenzen : Bericht der Kommission "Auswertung der Bundestagswahl 1987 und Folgerungen für die weitere politische Arbeit", S. 23 9 項
- 12) Gerhard Herdegen, 1986 : Verspielte Glaubwürdigkeit : Die SPD und ihr Wahlziel absolute Mehrheit. in : *Politische Meinung*, Nr. 227, S. 41 ff.
- 13) *Der SPIEGEL*, 4.3.1985, S. 34 ff.
- 14) Helmut, Fogt, 1991 : Politische Entwicklung und Wahlkampf der Parteien 1983-1987. in : Hans-Joachim Veen/Elisabeth Noelle-Neumann : *Wählerverhalten im Wandel : Bestimmungsgründe und politisch-kulturelle Trends am Beispiel der Bundestagswahl 1987*. Paderborn, 1991, S. 62 政策プログラムのテキストについては、本稿では、オッフエンブルク党大会議事録（注 7）の巻末に収録されたもの

を参照

- 15) この点で、ニュルンベルク党大会からの後退がみられることを憂慮した発言もあった（オッフエンブルク党大会議事録（注7）S.82）。ユーゾーを代表するこの代議員は、緑の党との共闘を求める。
- 16) Fogt, a.a.O., S. 66
- 17) Palmer, a.a.O., S. 120 ff.
- 18) Krebs, a.a.O., S. 127 ff. ; Palmer, a.a.O., S. 154 ff.
- 19) SPD, 1987 : Analyse und Konsequenzen（注11）, S. 8
- 20) Krebs, a.a.O., S. 130 ff. ; Palmer, a.a.O., S. 156 ff.
- 21) ラオのポジティブな人物イメージを示すデータは、党発行のパンフレット（Aufbruch nach vorn : Die SPD tritt an : Handbuch für Wahlkämpferinnen und Walkämpfer für den Bundestagswahlkampf 1987）S. 15 を参照。他に Berger/Gibowski/Jung/Roth : Sieg ohne Glanz : Eine Analyse der Bundestagswahl 1987. in : Max Kaase/Hans-Dieter Klingemann (Hrsg.), *Wahlen und Wähler : Analysen aus Anlaß der Bundestagswahl 1987*. Opladen, 1990, S. 720 ff. も参照。
- 22) Monika Toman-Banke, 1996 : *Die Wahlslogans der Bundestagswahlen 1949-1994*. Wiesbaden, S. 318 ; Palmer, a.a.O., S. 164 ff. も参照。
- 23) Werner Filmer/Heribert Schwan, 1986 : *Johannes Rau*. Düsseldorf/Wein, S. 233
- 24) Palmer, a.a.O., S. 110 ただしフォークトは別の評価をしている（Fogt, a.a.O., S. 34 ff.）。
- 25) 目下どの党が優勢と思われるかとの問いに対し、86年7月の調査では、有権者の45%がSPDと答え、CDU/CSUと答えた者は37%に過ぎなかったが、1ヶ月後の調査ではこの割合はほぼ逆転し、CDU/CSUが48%、SPDが36%となっている。CDU/CSU支持者の間で自党優勢と考える者は、この間59%から76%へと上昇しているのに対し、自党優勢と考えるSPD支持者の割合は、79%から65%へと低下している（Fogt, a.a.O., S. 38）。
- 26) Zundel, a.a.O.（注3）SPD連邦事務局長のグロッツも、同様の見解を表明している。Peter Glotz, 1987 : Die deutsche Linke nach den Januar-Wahlen 1987. in : *Neue Gesellschaft*, S. 101
- 27) Krebs, a.a.O., S. 138 ; Reinhold Roth, 1987 : Die niedersächsische Landtagswahl vom 15. Juni 1986 : Normalität des Wählerverhaltens statt Stimmungsdemokratie. in : *Zeitschrift für Parlamentsfragen (ZParl)*, Heft 1/1987, S. 13
- 28) Thomas Saretzki, 1987 : Die Wahl zur Hamburger Bürgerschaft vom 9. November 1986 : Ende des Traumes von der eigenen Mehrheit/oder : Die SPD vor der Bündnisfrage. in : *ZParl*, Heft 1/1987, S. 19
- 29) Fogt, a.a.O., S. 40 ; Saretzki, a.a.O., S. 26
- 30) Saretzki, a.a.O., S. 31
- 31) SPD, 1987 : Analyse und Konsequenzen（注11）, S. 11
- 32) Krebs, a.a.O., S. 145
- 33) Krebs, a.a.O., S. 139, S. 143 ; Palmer, a.a.O., S. 166 ; *Protokoll vom Parteitag der SPD in Nürnberg, 25.-29.8.1986*（注7）, S. 37
- 34) Krebs, a.a.O., S. 122 ff.
- 35) Ebd., S. 142 ; *Der SPIEGEL*, 17.11.1986, S. 21
- 36) Krebs, a.a.O., S. 143 ff. ; Palmer, a.a.O., S. 160 ff.
- 37) 87年連邦議会選挙の州ごとの結果は、Berger/Gibowski/Jung/Roth, a.a.O.（注21）, S. 695
- 38) SPD, 1987 : Analyse und Konsequenzen（注11）その他の選挙結果分析としては、Berger/Gibowski/Jung/Roth, a.a.O.
- 39) SPD, 1987 : Analyse und Konsequenzen, S. 35
- 40) Ebd., S. 41
- 41) Ebd., S. 43
- 42) Ebd., S. 5, S. 54 ; Krebs, a.a.O., S. 151
- 43) SPD, 1987 : Analyse und Konsequenzen, S. 46-54
- 44) Ebd., S. 6 ff.

- 45) Ebd., S. 11 ff.
- 46) Ebd., S. 22
- 47) Krebs, a.a.O., S. 152
- 48) 緑の党との連立をめぐる党内状況については, *Der SPIEGEL*, 4.3.1985, S. 31 ff.; 28.10.1985, S. 29 など参照
- 49) Gunter Hofmann, 1987 : Vor den Enkeln kommen die Väter : Der Rückschlag in Hessen brems den Wachwechsel in der SPD. in : *Die ZEIT*, Nr. 8/1987
- 50) ゼーハイマー・グループに関するまとまった記述は少ないが, *Der SPIEGEL*, 23.2.1987, S. 44 ff.; *Frankfurter Allgemeine*, 14.12.1987 など参照
- 51) カナル・アルバイターについては, Ferdinand Müller-Rommel, 1982 : *Innerparteiliche Gruppierungen in der SPD : Eine empirische Studie über informell-organisierte Gruppierungen von 1969-1980*. Opladen
- 52) *Der SPIEGEL*, 14.3.1983, S. 14
- 53) *Der SPIEGEL*, 23.2.1987, S. 47
- 54) *Der SPIEGEL*, 17.11.1986, S. 24
- 55) Uwe Jun, 1994 : *Koalitionsbildung in den deutschen Bundesländern : Theoretische Betrachtungen, Dokumentation und Analyse der Koalitionsbildung auf Länderebene seit 1949*. Opladen, S. 161
- 56) Krebs, a.a.O., S. 152 注 201
- 57) Gunter Hofmann, 1987 : Es geht um ein Signal : Die junge Generation der Sozialdemokraten will nicht unbedingt einen anderen Kurs steuern. in : *Die ZEIT*, Nr. 7
- 58) Krebs, a.a.O., S. 153 ; Peter Lösche/Franz Walter, 1992 : *Die SPD : Klassenpartei-Volkspartei-Quotenpartei : Zur Entwicklung der Sozialdemokratie von Weimar bis zur deutschen Vereinigung*. Darmstadt, S. 101

Die Wahlkampagne der SPD bei der Bundestagswahl 1987 : Zur mikro-politischen Analyse in bezug auf innerparteiliche Lage und Koalitionsproblem

von Hajime ONO

Resumeé

Bei der Wahlkampagne 1986/87 scheiterte die SPD an ihr unverkennbar unrealistisches Wahlziel "absolute Mehrheit". Man nennt manchmal dies einen strategischen Fehler, dessen Hintergrund jedoch nicht so einfach war : Angesichts ihrer innerparteilichen Lage war es sogar vernünftig, daß die Parteiführung einen Regierungswechsel durch ihre absolute Mehrheit aufrief, um innerparteiliche Auseinandersetzung über Koalitionsproblem zu vermeiden.

Bei diesem Aufsatz handelt es sich um eine Beschreibung ihrer Wahlplanung, Kampagne und ihrer innerparteilichen Lage nach der verlorenen Wahl. Nach dem Raus Versagen war die Diskussion über Koalition mit den Grünen kein Tabu mehr, aber gleichzeitig organisierten sich innerparteiliche Konservative, um mit der Annäherung zu Grünen zu widersprechen.

Der Autor verfolgt z.Z. eine Forschungsserie über das Thema "das rot-grüne Experiment und dessen Scheitern". Dieser Artikel bildet eine Einzelfall-Studie anlässlich einer Wahlkampagne der SPD.

(本学講師)